

痛かったろうな…の訓練

島根県 訂心寺 住職 木村芳典

あるお檀家さんのお宅に伺った時の事。小学校6年生のトモ子ちゃん、いつものように正座してお経を聞いていました。でもその座り方が何か不自然です。私は、その訳を聞いてみました。

前の日に、教室でトモ子ちゃんが椅子に座ろうとした瞬間、ある男の子が、ふざけてその椅子を後ろに引いたので、トモ子ちゃんは尻もちをつき尾てい骨を強く打ったのだそうです。

私は「それは痛かったね。つらかったね。それでその時、周りのお友達に手を貸してくれた？」と尋ねました。「誰も何もしてくれなかった…。みんな笑ってた…」と、トモ子ちゃんは少し悲しそうな顔になりました。

作家の司馬遼太郎さんの「二十一世紀に生きる君たちへ」という本に、こんな言葉があります。「人間は、他者への『いたわり』や『優しさ』を生まれながらには持っていません。それは『訓練』によって身に

付くのです。その訓練とは、友達が転んだら『ああ痛かったろうな…』と感じる気持ち、その都度、自分の中で作り上げていけばいいのです」とおっしゃっています。

転んだトモ子ちゃんを見て「痛かったろうな」と感じ、「大丈夫？」と、手を差し伸べてくれる友達が一人でもいたなら、トモ子ちゃんはどうなに嬉しかったことでしょう。

「子は親の鏡・社会の鏡」と言われます。大人達は、日頃どれだけ他人の痛みを感じる大切さを、子供達に諭したり、促したりしているでしょうか。子供達の姿を見て反省し、責任を感じなければなら

ないのは、私達大人の方ではないでしょうか。帰り際、私がトモ子ちゃんに「困っているお友達がいたら、助けてあげてね」と言うと、「うん、分かった」と大きく頷いてくれました。

(令和三年一月放送)